

うの開市で買って、持ってきていました。荷物からすると、白紙と白墨が多かったです。それは全部役場に寄付したんです。それでその返礼として特別配給を貰いましたね、それはニンジンとジャガイモの乾燥したもので、一斗籠に入ったものでした。あのときは、なんとも嬉しかったですね、食物が少ないときですから。

最初、船で引揚げてきて、上陸したとき、ちょうど港の収容所の前の道路を、グレーダーでもって道の敷きならしをしていました。それを見てですね、これは日本が負けたのも無理はなかったと、すぐその時点で感じましたね。それから浦添にきたら一本の木も草もないし、住んでおった浦添城址の北側ですね、そこには大人が六、七名でとりまくような幹の、松の太木があつて、うっそうと茂つておつたんですが、それがぜんぜんない。それで見ると影もない風景なので、なんでこんなところへ帰ってきたかなあと、そんなふうに感じました。

村が遺骨拾集したのは、たしか一九四七年になってからでした。カマスに入れてですね、部落内や畑の中やあちこちから、全村民総出して、遺骨を集めました。城址の中の浦和の塔に、自然洞窟があるんですが、そこに納骨堂を作っておさめたんです。六十五年に、遺骨を焼いて灰にするようになったとき、カマスで百三十八袋ありました。トラック三台ですね。それは拾集できたところだけのものです。落盤などして拾集できないところはそのままなので、納骨堂に安置されているのが五千余柱ですから、実際の死者はもっと多かつたことでしょう。拾集できなかったところが、浦添には、三か所あるといわれています。沢峠(たけ)の一つ、前田の方にも一つ……。

仲間(浦添村)

星 雅彦

時 一九六九年十月十四日

場所 字仲間 公民館

氏名	現住所
宮城盛善	
与座保孝	
銘荻ツル	
宮城高進	

解説

新馬調教手だった宮城盛善氏の体験談は、短く、あまりにも整理されすぎていて、簡単すぎたわけであるが、他日浦添村役所で知念明氏から聴取したときの、捕虜になるときの状況と全く一致したので、そうした実証的な裏付けとしての意味があつた。

与座保孝氏の特徴は、食糧難の戦時中、精米業をしていたということである。しかも、住民にとっても軍人にとっても主食である米は、何にも替えがたいほど重要なものであつたが、いざ身の危険になると、当然ながら命には替えられず、米を顧みないという情景が出てくるのである。村長と一緒に大事な配給米を守りつづけるが、とうとう捨て、逃げる話がある。また、戦場で日本軍が米を運ぶよう強要しながら、与座氏らが苦勞して運んで行った先方では全く

それに無関心で、責任をもって受取ろうとしない話がある。それは当時の軍部の無計画性の一端を露呈してもいようが、敗北にあがいて、支離滅裂になつていたことが窺い知れるのである。そして与座氏が死を決して捕虜になつて行くとき、大事に持ち歩いていた一升の米を捨てて出て行ったということは、まぎれもなく絶望感を意味していたであろう。極限的な状況は、戦争体験者の中に随所にあるが、銘荻ツルさんの、壕の中で水が欲しいばかりに、とうとう小便を溜めて子供に飲ませたということは、子供への愛情と、生きようとする極限的な行為であろう。

この仲間での取材の中では、宮城高進氏の話が、もっとも詳しく、かつドラマチックであつた。当時十六歳だったというが、その記憶力には驚嘆するものがある。しかしそれには、一方に、亡くなられた父親の手帳のメモからあずかるものが多くあつて、記憶を支えているのであろう。死の直前まで簡単にメモされてあるその手帳には、当時の農村の供出の種類や数量などが記されており、それは別な面から貴重な資料となるが、ここでは割愛し、戦火の中の日記のごく一部を転載させて貰つた。なお宮城高進氏の淡淡とした談話の中には、記録文学的な要素というか、さまざまに真実が見事に表現されていたように思われる。それは少年の目立たぬ勇敢さ、繊細な感情、肉親愛、哀しみ等である。

宮城盛善(二十五歳) 軍属

当時、沖縄の軍属というのは、軍の作業員みたいなようなもので

した。私の場合には、野戦重砲隊に属していて、私は馬の経験があるからといって、村役所から砲兵・騎兵関係が五名選ばれましてね、私もその中の一人になって、私の名目は新馬調教手でした。

軍属になってからは、調教手もやるし、それから馬車引きもやりました。空襲がはじまってからは、軍の炊事の野菜類運搬になり、イモや野菜が各村・各部落に割当て供出があって、それらを運搬しておりました。

三月の中旬頃に、私の持っていた馬が空襲でやられました。それで、馬がいなければどうにもならんから、一時は家に帰っていなさい、そのうちまた部隊に呼ぶからということ、私は家族と一緒に帰ったわけです。

それから米軍が上陸した頃には、私たち家族は、グスクバルの自然壕に入っていました。そこには約四百名(兵隊が、五、六十名ほど、一般住民が三百五十名余り)が避難していました。グスクバルの壕は、仲間の東の方、浦添城址の側にあります。四月の下旬に、その壕は、米軍に馬乗りされました。そして、爆雷のようなものを打ちこまれたのです。

そのために落盤しまして、入口の落盤した下には負傷した日本兵が寝ておったんですがね、そのために兵隊はほとんど死んでしまいました。

その壕の中では、屋富祖の知念明さんも一緒に居ました。与那原出身の人と私と知念明さんは、蒲団をかぶって、どうにか難をのがれました。それから米軍に包囲されていることが判り、もうどうにもならないというわけで、決心した知念明さんがまず出て行って、捕虜

て命令するので、私は仕方なくこっちから城間の方へ通って仕事をしておりました。

空襲があつてからは、機械も半分こわされて、家の壁も穴があいておりましたが、軍の米が二百袋も入っておりましたので、仕事を つづけなければなりません。二百袋の米を二分搦きにして、軍に早く引取って下さるように頼んで、ようやく米を引渡してから、私たちは避難したのです。

避難した壕は、山川原ヤマカハル原ノハラといつて、元の役所の前、(現在の中学校のある所)にある壕でしたが…。そのへんには日本軍の壕もあり、農会の壕もありました。

精米所を引揚げて後、農会の事務所に来てみたら、配給米が沢山ありましたがそれを番する人もおらず、みんな逃げてしまっておりましたから、私と村長さんと交替で米の番をしておりました。しかし間もなく砲弾が激しく飛んできたもんだから、私は村長さんにもう逃げた方がよいかと言ったのですが、村長さんは、いや大丈夫だとおっしゃるもんだから、じゃ村長さん交替して下さいと頼んで、私はさきに壕に帰ったのであります。

ところが、壕の中も、雨のように飛んでくる艦砲射撃の場合には、土が崩れ落ちてきますから、そこで死ぬより出た方がいいと考えるようになって、そこから出たのであります。

それから首里シイレの末吉シゲの山の壕に二、三日おりました。末吉の山の壕には、避難民が何千人も入っておりました。そこも弾が雨が降るように落ちてくるもんですから、そこにもおられなくなって、今の主席官舎の付近、元の与儀の農業試験場の東の墓の多い所に行っ

になるほかなくなつたとき、与那原出身の人が手榴弾で自決したんです。その瞬間に、私は決心して壕から出ました。そしたら、明さんが大丈夫だから来なさいと呼んでいました。屋富祖の知念明さんとは、捕虜收容所までは一緒に居ました。

私は宜野湾の喜友名に收容されました。喜友名では、テントの周囲の整地やら、日本兵と避難民の死体を、近くの防空壕や洞穴や溝に、投げ込んで埋める作業をしていました。

何週間か経って、それから私は知念村の百名收容所へつれて行かれ、兵隊だったかどうか、軍関係のことをいろいろと訊問されました。百名の收容所にいた頃は、非常に暑くなっていましたから、六月初旬だったと思います。そこから、PWで石川へ運ばれて行つたわけです。石川で終戦を迎えました。石川からはコザへ行ききました。コザには半年ぐらいいました。そして先遣隊として、私は自分の部落へ入ったわけです。

与座保孝(四十一歳) 精米業

私は宇城グスク間マの方で農業組合の精米係を受持つておりました。精米の仕事は昭和二十年の三月二十七日までやっておりました。一般配給の米も、軍の米も引受けておりますから、いそがしく、軍の米は二分搦きにしておりました。

三月二十日頃からは、役所も住民も軍も、ほとんど壕生活をしています、私もはや仕事ができないと思ひ家に帰ってきましたら、兵隊さんが、あんたは軍人と同じだから精米をつづけよと私の家にき

て、その墓の中に入っておりました。

その頃は、浦添と首里の戦闘になつておりましたから、またそこも弾が激しくなつて…。そこでは、墓の中が崩れて、親戚の者が土の中に埋まってしまい、みんな引出してやっと助けました。その人は敗戦になつてから收容所で死にましたが、その頃はまだ意識は確か、足を怪我してましたから、移動するときには担いで運ばれていました。

そこから私たちは与那原にめぐつて、玉城村の船越の方に行き、その壕に入っていました。そこは雨が降ると水が中へ流れこんでくるもんだから、そこから出て、また別の壕に入りました。十四、五名一緒に居ました。

そこへ日本軍の将校がきて、男はみんな軍に協力せよと命令をくだし、私も出されました。そして私たちは、命令通りに米俵を二名で担いで、前川の壕に運びました。半里ぐらいの距離を三回運びましたが、米俵を前川に持つて行ったら、受取る人がいないんですね。どこに置きますかと訊いたら、そのへんに置いておきなさいというもんだから、壕の入口に置いたんですが…。あ、これは、兵隊は協力やれやれといっても、自分たちは責任もって受取りもしないし、また煙草もふかしてやるとか飯もくれてやるとかいっても、実際には煙草一本もくれないで、いいかげんだな、もう逃げた方がいいと思つて、すぐ帰ってきて、さらに逃げることにしました。

それから、糸満方面へ行くのはよいかと思つて、新城を通つて、具志頭を通りぬけて、波平(ハンジャ)にさしかかったら、そのあたりは燃えていて、壕もなく、樹の下や民家に隠れておりま

した。

そこでは、通りがかりに、兵隊が二人、手榴弾で死ぬからと言っていました、とめることもできず私たちが二、三十メートル行き過ぎた所で、何か物音がしたと思ったら、もう自決していました。その死体は、私たちの手で畑に埋めて葬りました（戦争が終ってずっと後、そこへ行ってみましたが、畑は敷きならされて、どこだったか判らなくなっていました）。それから、糸満の人でしたが、母親が死んで、その側に十一、二歳の少年が泣いて、お母さんと云いながら抱きついていました。私は畑を掘って、その母親の死体を埋めてやりました。

それから、波平の部落は、どんどん家も木もせんぶ燃えてきました。逃げるところもないし、迷った揚句、私は火の間をくぐりぬけて、やっと逃げました。あの少年は元氣を取戻して糸満の方へ行くと言って別れましたが、どうなったか判りません。

喜屋武（チャン）に行ったら、そこはもう海で、逃げるところもないから、また戻らなければなりません。ところが友軍の兵隊は、帰さないというのです。私はどうせ死ぬなら自分の部落で死にたいんだからと、兵隊と口論しました。浦添から何か月も苦労してここまできておるんだから、撃つなら撃てと、喧嘩したら、どうとう兵隊は折れて、日が暮れてから帰らなさいと言ってしまいました。日本軍は、こっちにも十名ぐらい、あっちにも十名ぐらいと、いたるところに散らばっていました。私は逃げ回っていました。また吹き飛ばされる時がありました。私は逃げ回っていました。また機銃掃射にもありました。私は精米をしているとき、兵隊たちが

から米軍の所へ行きなさいとしきりにすすめましたが、いや捕虜になることはいけないことだから、頑張りますと言って、残っていました。そうしているうちに、見えるところで、十四、五名が一緒になつて手榴弾で自決していました。兵隊の中には、濡れている服を干しているものもあるし、鬚を剃っているものもいましたが、その側で自決していました。私たちは仕方なくその前を通って、米軍の戦車が見える方へ向かって、歩いて行きました。穴から出るとき、一人の年取った兵隊は私に、戦車にひき殺されることを覚悟していた方がいいよと言いました。

私は死ぬ覚悟で、持っていた一升の米もすてて、穴から出て行ったら、アメリカ軍がすぐに近寄ってきて、私の身体検査をして、銀貨やら紙幣やら債券やらを、珍しがって没収しました。

それから富里（具志頭の誤り）の具志頭小学校につれて行かれました。そこに一日いて、そこから歩いて私たちは知念村に行きました。別に、アメリカ軍は命令もせず、ついて来ませんでした。私は他人の石垣を利用して、芽を刈ってきて仮小屋を作って、そこに住むことにしました。

捕虜になってから、死体処理の作業がありました。こわくて行きたがらない人が多かったのですが、行かないと配給がないので、私も一週間は行きました。そのときに見たんですが、マブニの丘に休んでいた避難民が全部死んでいました。艦砲でやられたんだろうと思います。そこには、着物や荷物も残っていて、またそれが欲しさに死体処理の作業を希望して出るものもいました。その沢山の死体は、なかなか片付かないので、後からはアメリカ戦車で押しやっ

ら、飛行機がくる場合には飛行機に向って逃げなさいと教えられていましたので、その通りやったら運よく弾には当たりませんでした。

喜屋武からは米須に行きました。その空家に隠れていると、弾が飛んできて、私の帽子は射り破られて、後の方にいた女の人の喉に当たって、その女の人は即死していました。その死体も畑に埋めて葬りました。

夜、マブニの方へ移動したのであります。マブニの城址は、すでにアメリカ軍がのりこんでいて、上半身裸になったアメリカ軍が火を燃やしているのが見えました。その頃になると、ほとんど戦闘はなく、友軍も弾を撃つ様子もありませんでした。

マブニの丘の手前の、西側に池がありました。私は水が欲しくて、そこへ行つて水筒に水を入れてきて、飲んだんです。なんだか臭い水でした。翌日になって、その池に行つてみたら、その池には兵隊の死体がいくつも浮いていて、水は血の色をしていました。私は血のまじった水を飲んだんだなあ、とびっくりしました。

池の側で、一人の娘が腿を破片でやられたらしく、倒れていました。その娘を、父親らしい人が担いでどこかへつれて行きました。

マブニの東側の原っぱには、何千人の避難民が、夕方になると集まって休んでおりました。片一方は海で、三方は敵がいるので、もう逃げる所がなかったのです。

私たちは、休むよりは歩いた方がいいと思って、その下の海岸に向かつて降りて行きました。その岩の下ガタの穴に一夜をあかしました。そこには、友軍が四、五十名いて、私たちに住民は殺さない

て、海の方へ落として、埋めていました。

知念にいるとき、防衛隊だったかどうか、調べるために百名の収容所に二十一日間も入れられ、取り調べを受けました。

私の家族は、みんな疎開させてあったので、私一人で、さまざまな人達と一緒になつたりして、逃げ回って、捕虜になったのであります。

銘 苅 ツル（四十一歳） 家事

四月七日頃、立退き命令が出ましたが、私たちは、学校に向かっている六班の壕（グスクバルの隣）を、みんなで掃除して、芽を刈ってきてそれを敷いて、そこに十家族入っていました。

私の家族は、長男と次男は兵隊に、長女は川崎の軍需工場に行つていて、次女（十五歳・二高女）と三女（八歳）と三男（五歳）とおおあちゃんと私の五名でした。そして私は妊娠八か月でした。

そのうちに、私たちの壕へ、兵隊さんが入りこんできてですね、ここは今に戦場になって危険だからどこかに出て行った方がいい、と、早く早く出て行きなさい、とすすめていました。

私たちは、防衛隊になった父ちゃん（夫）から、小さい子供もいるし妊娠もしているから一か所にずつと入っていなさいと、あっちこっち移ったりしているとかえって危ないよと、言われていたので、ずつとそこに頑張つて入っていました。今日死ぬかもしれない明日死ぬかもしれないと思つているうちに、どんどん出て行って、しまいは三家族だけになっておりました。

兵隊さんは、私たちも出して、入るつもりでしたが、出ないもんだから、側の壕に二、三十名が入ったり出たりしていました。そうして、兵隊さんは一線に立って出て行くけれども、ほとんど死んで帰らないし、また怪我して戻ってくるものもいました。ところが、とうとう兵隊さんたちは側の壕で死んでしまいました。どんなにして死んだか、ただすぐ近くの血のにおいがして、私たちの壕まで臭っておれなくなっていました。また私たちは、五日間も水を飲んでいませんでしたので、五歳になる子供が欲しいといって泣くもんだから、出て行くと死ぬし、ヒル潰を持っていたのでその汁を飲ましたら、ますます喉が渇いて水を欲しがらるもんだから、もう仕方がないから小便を集めて飲まそうということになったんです。ところが小便もなかなか出なくて、やっと茶碗の半分ほど溜めて、飲ましたんです。他の家族の人たちも、子供たちに小便を飲ましていました。食べるものといったら、友軍の残したカンパンが少し残っていましたが喉がなくなっているもので、一つ食べるのにも苦労しました。

そのうちに砲弾は、そこには落ちなくなって、シューシュー音たてて首里の方へ飛んで行くようでしたので、そこをみんなそれぞれ出て、家で水を沢山飲むうねえといつて、自分の家に戻りました。

そして家に戻って早速、井戸の水を急須から飲んで、芋クズ(澱粉)があったのでそれに黒砂糖を入れてあえて、それをみんな食べました。また、石垣に立ててあった畳が焼残っていたので、それを敷いて、みんな横になってとうとうとしてるうちに夜が明けてきました。どうしようかと迷っていましたが、首里の方へ行った方が

川)から、艦砲射撃ははじまっておったんですよ。この部落は、ほとんど石部隊で、球部隊も少しでしたが石部隊の本部があったので、兵隊は各民家に分宿していました。

砲弾が激しくなった後、四月一日に、北谷から上陸がはじまったとき、軍からの命令でみんな壕に隠れるようにとのことでしたので、昼は壕の中に入って、夜は出歩いていました。僕たちは、小湾クワンという家号の民家の壕に、四世帯で入っていました。壕は西と東に穴があいていて、後から人が殖えてきたもんだから、中に横穴を掘って、中を少し広くしてありました。

四月七日の午前五時に、この部落にいたら危ないから立退きしなさいという軍からの命令が出たもんですから、家族みんな揃って首里の繁多川まで避難したわけなんです。行きはしたものの、ぜんぜん壕がなくて、僕たちは民家の木の下に隠れていました。米軍の飛行機はどんどん飛んでいました。そこにはおれないもんですから、その翌日、引返して、部落の同じ壕にまた入ったわけですよ。

しばらくそこにいるうちに、米軍は嘉敷を通り越して、伊祖から上がってきたんですよ。部落の又吉武栄という青年とおばあさんと二人で、伊祖の壕の中でガス爆弾を撃ち込まれて逃げてきていたが、おばあさんからその話は聞きました。武栄は口から泡をふいて死にそうになっていました。その二人も僕たちの壕に入って、みんな看病して、次第によくなくなっていました。

四月二十六日に、米軍の斥候が四名一組で部落に入ってきていました。その翌日は、壕の中に入ってきました。ぼくたちは、横穴に隠れていて、米俵などで入口を密封して、逃げ去った後のように見

いいだろうと思って、出て行ったら、すぐに捕虜にとられました。そのとき、周囲からアメリカ兵が五、六名きて、逃げる暇もなく、銃を向けられていました。私は子供たちやおばあちゃんに、どうせ殺されるんだから、固まって坐っていた方がいいと言ひ、みんな抱き合って坐ったら、言葉は判らないけれど、手真似などで感じたんですが、殺すことは殺さない、あっちの方へ歩きなさいと、言っているようでした。それで、アメリカ兵に手を引かれて、表の道に出され、ジープに乗せられ、大山に収容されました。五月の四、五日頃だったろうと思います。

大山では、玄米のおにぎり、一日に二回ありました。大山からはコザの安慶田の前に行きました。私は越来に産婆さんがいると聞いて、そこまで行って、お産をしました。だけどその子は、五歳になってから、肥壺に落ちて、徳がなくて死にました。また、父ちゃん(夫)が防衛隊で死んだことも、後で聞きました。

宮城 高 進(十六歳) 高等科二年

その当時、僕の親父は区長をしていて、それからお袋の弟は仲間郵便局長をしておったもんですから、僕は高等科を卒業した直後で、二つ年上の長男が召集で兵隊にとられた後釜に、郵便局の見習いとして勤めておりました。手紙などの郵便物は首里郵便局の管轄で、仲間郵便局は電報だけを扱っていました。

そしてちょうど三月二十三日に、オオ・ヌナトグわ(奥武・港

せかけていました。

僕は隙間から覗いたんですが、壕の中にある食糧品やら荷物やらを、米軍は足でひっくり返して、あさって、なんにも取るものがないもんだからそのまま出て行ったんですよ。そのうち、密封された壕の中の空気は濁って息苦しいもんだから、ぼくの弟や兄の子供やよその赤ちゃんも、泣いてしまってますね。すると米軍は、壕の中に人がいると判ったからなのか、入口を頑丈に塞いでしまったんですよ。

それから何の物音もしないもんだから、多分、米軍は帰ってしまったんでしょうね。親父が懐中時計を見たら、ちょうど四時でした。だんだん日が暮れてくると、空気は通らないし、きつくなってますね。どうせ死ぬのなら外でアメリカを一人や二人は殺してから死んだ方がましだと、僕のお袋が言い出したんですよ。みんなそんな気になって、親父と僕が入口を押しわけてやっと開けてですね。お袋が赤ちゃんを抱いて包丁を持って、真っ先に出たもんだから、みんなつぶいて出たんです。

お袋が赤ちゃんを抱いて出て、つづいて兄嫁、僕の妹(十三歳)、弟たち(九歳・六歳)が出て、最後に残ったのは親父とおばあさんと三歳になる妹と僕の四名でした。四名はわずかに遅れて出たんですが、出てみたらお袋たちはどこへ行ったのか判らんわけですよ。

おばあさんは、大豆を砂糖で煮たものを入れた壺と、子供たちのヘソの緒と、印鑑を入れた袋を持って、親父は鉄カブトを被って竹槍を持って、僕も竹槍をもって、東側に出たら、民家の近くで米軍

四名が穴を掘っていました。僕たちは、いろぞというわけです
ね、焼けた屋敷に一応隠れてから、道に出て逃げたんです。

そして僕たちは井戸の側を通って、友軍と米軍の弾の音が入り乱
れて聞こえていましたから、小学校の方へ、それから校長の舎宅の
方へ行ったら、よその家族三世帯ぐらいいと一緒になりましたが、そ
の家の曲り角で、僕は流れ弾に当って、左腕を負傷しました。

僕は青年学校の服を着て竹槍を持っていましたが、弾が左腕を貫
通しているのになんか痛くもなかったもので、学校の運動場を横切
って、その下の日本軍の壕におりて行ったわけですよ。そこには嘉
敷からの第一線の兵隊が撤退して入っておったんです。すると番兵
が、どこからきたんか、敵はどこにおるか、中に入れということに
なって、僕たちを壕の中に入れて貰ってですね、一時間ぐらいい兵隊
たちは僕たちから状況を聞いてですね。それからカンメンボウを三
袋、与えたんです。僕は日が暮れるまで休んでいました。親父はお
袋を探しに出掛けて、いなかっただと戻ってきました。

それから僕たちは、夜になってから、前の畑の中を歩いて、経塚
を通って、首里に行きました。途中、経塚では、助けてくれえと叫
んでいる瀕死の兵隊がいました。また、数人の斬込み隊とも出会
いました。親父が、ご苦労さんと言ひ、敵はどこまで来ているかと訊
かれて、仲間や前田あたりまで来ていると答えていました。首里の
近くでは住民の死体を見ました。

僕たちは首里の儀保あたりにつきましたが、その晩で、職名から
一日橋を渡って津嘉山を通って、東風平村の志多伯に行きました。

と、再び逢いました。首里の方はだいぶんやられて後退しているん
だと、兄貴は戦況を親父に話していましたがね。それからまた第一
線に出かけ、それっきりもう兄貴は戻ってきませんでした。

五月二十九日に、小城は立退き命令が出てですね。ぼくたちは高
嶺村の与座岳の手前の高良に行き、そこで一泊しました。

高良の方では、同じ日本人同士が、鉄カブトのことから殺し合
いをしていました。その日、石部隊の団体二十名ぐらいい高良の部落
に入ってきたわけですよ。そのとき球部隊の生き残りの上等兵が一
人、鉄砲を持って鉄カブトを被って、休憩していました。そこへ石
部隊の中に鉄カブトを持っていないのが一人いて、その兵隊が休憩
している球部隊の兵隊の鉄カブトを取ったわけですよ。そしたら、
なぜ人のものを取るかと怒って、奪い合いになって、球部隊の上等
兵は銃剣で刺し殺されましたね。二十名ほどの石部隊の連中は、着
剣していました。その兵隊たちの言い分では、貴様球部隊の野郎が
何ができるか、こんどの戦争では石部隊がやっているんだと、いう
ことでした。

六月一日に、玉城村がよいと聞いて、高良から富盛を通って、具
志頭街道に出たら、港川の方にもすでに敵がいるという噂があつ
て、僕たちは方向を変えて破名城に出たんですよ。その間は、流散
弾が激しく、休まずに夜道を歩きつづけました。それから、どんど
ん西へ進んで、糸満の手前の国吉あたりまで行っただんです。六月七
日でしたか、国吉の部落で民家に入って休んでいたら、通りがかり
の誰かが、君たちのお母さんを見たよと、教えてくれました。お袋
たちは、ちょうど糸満から逆に上がって来ていたんですね。間もな

なぜ志多伯に行つたかというのと、ぼくの兄貴の通信隊の本部が志多
伯にあると聞いていたからです。

志多伯では、壕がないもんですから、屋号カナという民家の防
空壕に入りました。その防空壕には、樽に入った黒砂糖が四個あり
ました。僕たちは、食糧も何も持ってなかったもので、四日間、水と
その黒砂糖で飢えをしのぎましたよ。

そこにきてから、兄貴の部隊の、東風平村の小城に野戦病院があ
ったので、僕はそこで傷の手当を受けました。

註、宮城高進氏の父親の手帳には、次のように記されてある。
「高進ノ手ヲ兵隊ノ衛生ノ方ヘ行ツテ、手当ヤツタ。一諸ノ方ハ
樋川小四名、内四名、タル比嘉小、カミ小子供二名、計十名デア
ル。」

野戦病院に行つたのは、五月四日です。五月八日には、ぼくの兄
貴の、小城の部隊の壕にお世話になりました。その壕で、ちょうど
一線から怪我人をつれてきた兄貴と、僕たちは対面しました。兄貴
は一等兵になっていました。あのとときの一等兵の俸給が十八円だ
ったと思います。親父に金がなければ少し取らんかと、兄貴が話して
いるのを、僕は憶えています。あの頃、みんな虱に悩まされて
いましたが、僕の三歳になる妹は、瘦せっぱちになってですね、入
口の陽当りで兄貴が虱取りをしてくれていました。そのとき、内地
の炊事軍曹が通りかかったのに、ぼくの兄貴は敬礼をするのを忘れ
てやらなかったわけですよ。あとで、兄貴は呼ばれて、貴様は一等
兵のくせに何かと、顔を殴られるのを、ぼくは見ました。

その後、十二日と十三日に、一旦戦場に出かけて帰ってきた兄貴

く、そこで偶然、僕たちはお袋たちと逢いました。が、妹(十三
歳)と弟(九歳)は、たった一時間前に艦砲にやられて死んだとい
うことでした。お袋と弟(六歳)と赤ちゃんは無事でした。

そこで、僕と親父と、兄嫁のお父さんと、死体の場所を知って
いる叔母さんと、その四名で、明け方に、スコップを借りて出かけた
わけですよ。そうしたら、国吉から糸満に出る原野の中に、妹と弟
とが爆風で怪我もしていずに裸になって死んでいました。他にも親
戚の叔母さんが死んでいました。時間がなくて、穴は掘らずに、溝
の中に死体を入れて、土を被せました。(高進氏の父親の手帳に
は、「葬ツタノハ、六月八日デアル。」と記されており、そこま
でメモは終っている)。

その後、僕たちは真栄里から、伊敷、糸州、米須、大渡、と通
つて、弾が飛んできたら逃げて、隠れたり歩いたりして進みました。
その途中、伊敷では、役所の助役さんと一緒になったんですが、石
垣に隠れているとき、僕の前を破片が飛んで、その助役さんの顔を
けずり取って、怪我させていました。もう砲弾は雨のように飛んで
きました。

大渡からふたたび米須に出て、僕たちは喜屋武部落に行きまし
た。喜屋武岬の前に、大きな山がありますが、あの山の中に入った
んですよ。あの山の中には、友軍が掘ったタコ壺がだいぶあって、
その中に僕たちは入っておりました。タコ壺は小さいので、分散し
て入っていたわけですよ。

そこで、親父と兄嫁のお父さんは、どこかで手に入れた米をみん
なに分配しようとして、タコ壺から出ているところを、艦砲にやら

れてしまつて、即死したんです。お袋は半狂乱になりましたが、僕は二人の死体をタコ壺の中に入れて、葬りました。そのとき、僕は親父のポケットから手帳を見つけて出したもんだから、形見と思つて取つて大事にしていたわけです。親父が死んだのは六月二十一日だったと思います。

六月二十二、三日頃、船からマイクで放送していました。「デテコイ、デテコイ、沖繩の皆さん、なぜ苦勞して苦しい思いをしていますか。男は裸でフンドシ一本になつて、子供と女は、そのまま、デテコイ、デテコイ」と、また、「知念村に皆さんのご馳走も待っています。デテコイ、デテコイ」と。それでも、上の方からは、米軍がつぎつぎ壕の中に手榴弾をぶちこんでいるし、海からは拡声器が呼んでいるし、僕たちはデマ宣伝だと信じて、出て行かなかつたわけです。近くの海岸には日本軍もまだだいぶおりました。その海岸には、大きな岩が沢山ありました。僕たちは兵隊たちと一緒に、岩の下に隠れていました。ちやうど朝鮮人の軍夫が五名、フンドシ一本になつて、とつぜん海に向かつて駆けていきました。すると僕の隣にいた兵隊が、この野郎ノと言つて、朝鮮人の一人を波打際で撃ち殺してしまいました。あとの四名は泳いで船に向かつて行きました。

僕たちは、ここ(米須より西よりの海岸)では死にたくないと思ひ、どうせ死ぬなら自分たちのシマ(部落)に行つて死のうということになつて、北へ向かつて突破しようと決心したのです。そして、そこから出て丘の上のぼつてみたら、そのアダンの茂みの中に、よそのおじいさんおばあさんたちが五、六名いて、その人た

り叔父さんが、お前から出てみると僕にいうもんだから、仕方なしに僕は出たんです。何もしないもんだから、みんな後からぞろぞろ出たんです。捕虜になつたのは、六月二十五日頃でした。アメリカは僕たちに手真似足真似して、まだ避難民はいないかと訊いていました。そしたら、崩れた茅葺き家にもまだいると、ヒガシモウさんが教えたわけです。それから茅葺き家に向かつて、大声でみんな出た方がいいぞおと叫んだら、やがて二十名ほどが、このこ出てきたわけです。ほとんど首里の金城区の人たちでしたが、その人たちから、僕たちはものすごく怒られてですね。それから、アメリカはもうそれだけかと訊いていましたが、まだおるといふと、みんな出せ、もし出なかつたら焼き払うというんですね。そのことを誰かが告げると、五名出てきてですね、最後にびっこになつた防衛隊が出てきました。

みんな揃つて、真壁の小学校の角あたりの広場につれて行かれました。ぼくたちは三十名ぐらいいましたが、そこには捕虜に与えるための、豆と肉の入つた罐詰が沢山あつて、その前に立たされました。そこで身体検査を受けて、ヒガシモウさんは役所の助役であり消防団団長もしていましたので、いろんな勲章を持っていて、疑われて引っぱられて行つたわけです。残りの大勢には、二十名ぐらゐの米軍がきて罐詰をあけて、しきりに与えたんですが、誰も毒が入つていふと思つて食べないわけです。そしたら、米軍が自ら食べてみせるんですね。ああ食べられるんだなと思つて、みんな食べ始めて、中には罐詰四個も食べるものがいました。

ヒガシモウさんのことを、みんなは殺されたらうと思つてい

ちは兵隊たちの死体の中に、眼だけぎらぎらさせて、黙つて坐っていました。まだ夕方でした。僕たちはアダンの中に隠れて、米軍の様子を見ていました。

夜になつてから、僕たちは歩いて今の姫百合の塔の裏あたり、真壁ドウムラ(同字)に来たわけです。そこにきたときに、米軍の電波探知機ですか、電線にひつかかつてしまつて、すぐ照明弾があがっていました。手榴弾と機関銃をあびてですね。僕は妹(三歳)をおんぶしていましたが、すぐそのまま伏せてですね。僕たちは約五メートル置きの間隔で歩いていましたが、先頭の叔父さんの妻と子供がやられたもんだから、僕たちは照明弾が消える頃までじつとして、それからゆつくりゆつくりまた引返してきたんです。

真壁の部落の裏に大きな池がありました。その池の手前まできてですね。そこでひと休みして、お袋が何か食べ物を探しに出かけてですね。ちやうど民家の壕の中に、油壺に油味噌を見つけて出してくれ。それでみんな飢えをしのいで、やがて夜が明けて、これからどうしようかと迷つたわけです。

その壕の近くに、バシヤンこになつて崩れた茅葺きの家があつたので、僕は何げなくその中を覗いてみました。すると中から、ものすごく怒鳴られてですね。敵がくるからあつち行け、というんですね。僕たちを助けて下さいと、僕が頼んでも、きくどころか、罵られてですね、絶対にきかないんですね。

仕方なしに僕たちは民家の壕にいたんですが、そこへとつぜん米軍が十四、五名きてですね。壕の中を覗いて、「デテコイ」というんです。でも誰もこわがって出ないんですね。ヒガシモウさんといつたでしよう。そこへ、赤い派手な着物をつけた子供をおんぶして、戻つてきていました。その子供というのは、電波探知機にひつかかつて攻撃を受けて先頭で死んだはずの子供です。母親は死んで子供だけ生き残っていたんですね。ヒガシモウさんはアメリカが拾つてきた子供を貰い受けてきたわけですね。

みんなが罐詰を食べ終つた頃に、トラックのGMCがきて、それに乗せられて運ばれたんですが、僕はこんどこそ捨てられるか殺されるかするんだと思つていました。そしてトラック二台が行つたところは、豊見城村の伊良波でした。ここでは、女と子供、防衛隊、日本兵、三か所に別々に入れられました。僕はまだ十六歳だったし、背丈も小さいし、妹をおんぶしていましたので、女子供の方にまっすぐ入つて行きました。そこで一泊したら、みんな下痢してしまいましたね。あどきの便所は、見えるところにただ穴を掘つてあるだけであつたもんだから、男も女もみんなそこで用を足していました。恐らく、何も入つてない胃袋に、急に罐詰を食べて、馴れないものを入れたもんだから、下痢をしたんでしょうね。

それから翌日、トラックが三十台ほどきました。そこに收容された約三千名とかいう避難民は、トラックで中部の宜野湾村の野嵩につれて行かれました。僕たちが野嵩に行ったのは、六月二十七日頃だったと思います。これが最後のまとめた団体の捕虜だと誰かが言っていました。そうして野嵩の部落の前の広場に、テントをいくつも張つて、その約三千名が收容されたわけです。そこには、六か月ぐらゐいました。

仕事ができるものは出るようにとのことだったので、僕は腕の怪

我もなおりかけていたもんだから、作業に毎日出かけました。朝、米軍のGMCがくると、並んで人員を数えてそれぞれに分乗して、仕事場へつれて行かれるわけです。僕の場合は、今の前島あたりに食糧集積所がありましたから、そことまた、那覇港の方につれて行かれ、食糧（米や雑穀類）の積みみをさせられました。それから北中城村の安谷屋の部落と、コザの東島袋に行つて、あそこは戦争ではすぐに占領されて焼けないで残っていましたから、僕たちはあのへんの家屋をぜんぶこわす作業をさせられました。そしてその材木は久志村の久志ぐわに運んでいました。それらを使って、むこうは堀立小屋を作ったということです。

前田（浦添村）

星 雅彦

時 一九六九年十月十日
場所 宇前田 公民館

氏名	現住所
親富祖 清武	
石川 カメ	
比嘉 真光	
宮城 カメ	
石川 トヨ	

解説

浦添村宇前田の取材は、夜七時から公民館で行なわれた。その夜は、ちょうど青年団の運動会の、打合せ会があつて、公民館の別室にはオートバイや自動車のエンジンと共に青年男女が十数人集まつていた。かれらは明るい都会的な服装をしていて、生き生きとした雰囲気の中で談笑していた。かれらはこちらの座談会の邪魔にならないよう心がけていたもの、溢れる若さを控えきれないようであった。そんなかれらの様子は、こちらの陰湿な座談会と比較すると、非常に対照的であつた。

二十五年前の戦場で悲惨な体験をした人たちの、その子供たちが

新しい時代の中で成長し、すでに別な現実があることを、その対比されるかれらの存在は、おのずから物語っているようであつた。そうしてさらに、あらゆる現実問題への志向は、過去の傷痕をないがしろにしては存在しないということを、再認識させるのであつた。

座談会中、男性の親富祖清武氏と比嘉真光氏は共通語で話されたが、石川カメさん、宮城カメさん、石川トヨさんの三人の女性は沖縄口で話された。筆者にとつてそうした翻訳ふうな仕事は初めてであつたので、いささか難事であつた。なお、宮城カメさんは、親富祖清武氏の叔母にあたり、南部へ逃避するとき東風平村の宇東風平あたりから一緒になつて同行しているので、宮城さん自身省略して話されたが、あえて質問をくり返さなかつた。

親富祖清武氏は部落に最初に撃ち込まれた砲弾で母を失い、それから逃避するとき壕の中に父を置き去りにして、結果としてその父も失つているので、文字通り孤児となつて孤児院に収容されたのであつた。

また、比嘉真光氏は、沖縄戦になる一年前に徴用されて、石垣島の白保で陸軍飛行場をつくる作業に従事したが、その後、現地召集されて軍隊生活を送っている。しかし、読谷飛行場の守備軍でありながら、米軍の空襲と同時に国頭の山岳に逃避し、約六か月、山中の敗残兵としての生活をしたのであつた。

それから、石川カメさんは当時五人の子供がいたが、四人の子供を失い、宮城カメさんは七人の子供のうち、五人の子供を失い、石川トヨさんは四人の子供のうち三人を失っている。ほとんどの子供たちを死亡させた母親たちの、それぞれの体験談は、ことごとく惨